

南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

# 小牧遺跡・平六間伏遺跡

1988年3月

鹿児島県熊毛郡南種子町教育委員会

(

(

2  
3  
4

(

(

小 物 遺 踪



C

C

## 序 文

昭和62年度杭廬地区県営農免農道整備事業の実施にあたり、埋蔵文化財の確認調査を行い、壊される小牧・平六間伏遺跡について十分な調査をし、その詳細を記録保存するための事業であります。

この発掘調査は、県営農免農道整備事業との関係で昭和62年10月12日から11月6日までの約1カ月の期間を費やし、縄文時代の土器・石器などの遺物が出土しました。

この発掘調査にあたり、ご指導・ご援助いただいた鹿児島県教育庁文化課の方々をはじめ、作業協力者の方々や土地所有者の方々に深く感謝申し上げます。

この報告書によって、多くの方々に埋蔵文化財の保護に対する理解を深めていただくとともに、広く文化財の保護になお一層ご協力をお願いする次第であります。

昭和63年3月

南種子町教育委員会

教育長 伊地知 勲

## 例　　言

1. 本報告書は、南種子町教育委員会が文化庁及び鹿児島県教育委員会の助成を得て実施した県営農免農道整備事業（抗風地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は南種子町教育委員会が調査主体者となり、発掘調査は鹿児島県教育庁文化課が担当した。
3. 本書の執筆・編集は井ノ上秀文・戸崎勝洋が担当し、河口貞徳氏（鹿児島県考古学会長）の指導・助言、盛園尚孝氏からは広田遺跡の写真の提供をいただいた。
4. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。

## 本文目次

序文		第3節 遺構	17
例言		第4節 遺物	17
第Ⅰ章 調査の経過	4	第Ⅳ章 平六間伏遺跡	28
第1節 調査に至るまでの経過	4	第1節 調査の概要	28
第2節 調査の組織	4	第2節 層位	28
第3節 調査の経過	4	第3節 各トレンチの調査	28
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	6	第4節 遺物	30
第Ⅲ章 小牧遺跡	12	第V章 まとめ	32
第1節 調査の概要	12	あとがき	
第2節 層位	12		

## 挿図目次

第1図 小牧遺跡・平六間状遺跡及び周辺遺跡	9	第9図 出土土器(1)	21
第2図 遺跡と周辺の地形図	13	第10図 出土土器(2)	22
第3図 周辺の地形及びグリッド配置図	15	第11図 出土土器(3)	23
第4図 土層断面図	16	第12図 出土土器(1)	26
第5図 集石	17	第13図 出土土器(2)	27
第6図 遺物出土状況(1)	18	第14図 周辺の地形及びトレンチ配置図	29
第7図 遺物出土状況(2)	19	第15図 土層断面図	30
第8図 遺物出土状況(3)	20	第16図 遺物	31

## 表目次

表1 遺跡地名表	10	表3 出土石器一覧表	25
表2 出土土器一覧表	24		

## 図版目次

図版1 遺跡遠景	33	図版8 出土土器(2)	40
図版2 遺跡近景・土層断面	34	図版9 出土土器(3)	41
図版3 土層断面・遺物出土状況	35	図版10 出土土器(4)	42
図版4 集石・土器出土状況	36	図版11 出土石器	43
図版5 調査風景	37	図版12 遺物	44
図版6 土層断面・調査風景	38	図版13 文様拡大図	45
図版7 出土土器(1)	39		



## 第Ⅰ章 調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（以下県文化課）及び南種子町教育委員会（以下町社会教育課）は、開発関係各機関と、事業着工前に当該事業区内における文化財の有無等について協議し、諸開発との調整を図っている。この事前協議に基づき、鹿児島県農政部（以下県農地整備課）は南種子町において「県営農免農道整備事業(枕風地区)」の計画に当たり、県文化課に文化財の有無について照会した。

県文化課はこれを受けて、町社会教育課とともに、昭和60年5月、当該地区的文化財分布調査を実施した。分布調査によると2ヶ所に土器の散布地を確認した。

この結果をもとに、県農地整備課、県文化課、町社会教育課でその取扱いを協議し、事業実施前に遺跡確認調査を実施することになった。

発掘調査は、国・県の補助を得て南種子町教育委員会が発掘調査主体者となり、調査は県文化課に依頼した。

### 第2節 調査の組織

調査主体者 南種子町教育委員会

調査責任者	◎	教 育 長	伊地知 熊
調査事務	◎	社会教育課長	岩 崇 徹 (62.6まで)
	◎	"	古 市 正 志 (62.7から)
	◎	体育文化係長	犀 川 宗 義
	◎	社会教育係長	中 峰 征 信
	◎	社会教育主事	原 田 清 昭
	◎	体育文化係	河 口 恵一郎
		社会教育係	上 妻 厚 子

調査担当者 鹿児島県教育庁文化課 文化財研究員 戸 崎 勝 洋

主 事 井ノ上 秀 文

出土遺物については、河口貞徳氏（鹿児島県考古学会長、県文化財保護審議会委員）の指導を受けた。調査企画においては、鹿児島県教育庁文化課長吉井浩一、同補佐川畑栄造、同主幹森田斉、同主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長立園多賀生、同企画助成係長浜松巣、同係の各氏の指導助言を得た。

### 第3節 調査の経過

小牧遺跡と平六間伏遺跡は直線距離にして約2km離れているため、まず小牧遺跡から着手した。小牧遺跡は既設道路の両側に拡幅する工事により削平される部分が遺存状況が良好と判断したため、グリッドは道路を縦断する方向を基本軸として設定し、10m×10mを1単位とした。A～G～1・2とし、各グリッドはA～1区等呼称した。

遺跡のひろがり、遺物包含層の確認のためとりあえず試掘溝を設けた。1～5トレンチがそれである。試掘の結果、層に縄文時代の集石や土器が出土した。なお、既設道路部分は遺物包含層がすでに削平されていた。

このため今回の発掘調査は、既設道路両側について実施した。

平六間伏遺跡は山間部の谷沿いの狭い農道の台地側の畠地で遺物を採集していたので、これら台地の畠地に、認意にトレンチを4ヶ所設定、順次掘り下げた。その結果、遺跡は耕作や畠地造成時すでに遺物包含層は削平され、消滅していることが判明したので発掘は中止した。

なお、周辺の畦等には耕作時に出土した石器等が置かれていたので採集した。

発掘調査は、両遺跡を含め昭和62年10月12日～11月5日までの24日間であった。

#### 日誌抄

10月12日～10月23日

小牧遺跡試掘溝（トレンチ1～5）設定し順次掘り下げた。1トレンチのアカホヤ層下に塞ノ神式土器（縄文）、2トレンチに集石出土。16日は台風襲来のため休み。17日より平六間伏遺跡へ移動。トレンチ（1～4トレンチ）設定。遺物・遺構ともに包含層削平のため出土せず。土層断面図、埋めもどしを行い完了。

再び小牧遺跡の発掘調査。1～5トレンチ遺物平板、レベル測量のち取り上げ。グリッド設定し既設道の両側を掘り下げの間、遺跡地形図、グリッド配置図作成。遺物は塞ノ神式土器出土。

10月26日～11月5日

既設道路南側部分掘り下げ。塞ノ神式土器が散見するが、遺構は検出されず。遺物分布区内は完掘。土層断面図作成等のち完了。発掘用具等点検、収納し調査終了。



## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

小牧遺跡及び平六間伏遺跡は鹿児島県熊毛郡南種子町に所在する。

遺跡の所在する南種子町は、西之表市・中種子町とともに種子島に所在する。この種子島は鹿児島の南方約115km、大隅半島南端の佐多岬の南東約33kmの洋上に浮ぶ島で、南北52km、東西6~12kmの細長い島である。

地質は基盤が古第三紀の熊毛層群からなり、中部から南部にかけてはこの基盤上に、新第三紀の茎永層群や増田層、第四紀洪積世の長谷層がおおっているという。

種子島の地形は基本的には隆起運動と、その後の侵食作用により形成された地形を呈する。最高所は282.3mの低平原島であり、地形の変化も乏しい。

南種子町はこの種子島の南部に位置し、東・南・西の三方は海に囲まれ、北は中種子町と接する面積110.21km<sup>2</sup>、人口約8,300人の町である。

南種子島町の地形は、北部の西之表市や中種子町に比較すると変化に富んでいる。町の中央部付近は海拔200m内外の丘陵地帯で起伏の多い地形を呈している。西岸の島間から南部の崎原にかけての台地は海岸段丘面であり、中央の台地とは急傾斜によって分けられている。

一方、東部は石岩や頁岩が露出、侵食が進行し丘陵地が発達している。この丘陵地の間には小河川による沖積平野が開け、島内でも最も広い水田が開けている。南部は砂丘地、東西両海岸は海食崖で奇岩が多い。河川は、宮瀬川、郡川、鹿鳴川がそれぞれ南流して太平洋に注いでいる。なお、種子島は年平均気温19度と暖かく、ソテツやヘゴ等熱帯性の植物が自生している。右図は平六間伏遺跡に隣接する谷川に自生するヘゴである。



平六間伏遺跡近くの自生ヘゴ

小牧遺跡は南種子町役場の西北約700mの標高約130mを測る中央台地に位置する。遺跡の西側には西流して東シナ海に注ぐ大川の上流によって開拓された小さな谷が南北に延びている。この小谷によって遺跡地は西側の台地と分断されている。遺跡はこの台地の西端に位置し、周辺は畠地となっている。

平六間伏遺跡は南種子町の西北部の海岸段丘の奥まった標高約102mを測る台地上に位置する。遺跡の北側は那辺川の上流に当たる。この河川による開析谷は東西には入り、台地を分断する。平六間伏遺跡は台地の北縁辺部の谷に接する地点に立地している。

このような地形を呈する南種子町の先史時代の遺跡については、盛園尚孝氏や旭慶男氏等の努力により、次第に解明されてきた。

本町における最古の土器は、永谷山遺跡出土の吉田式土器である。

この土器は縄文時代早期（約7～8000年前）に位置づけられるものである。永谷山遺跡は長谷の舌状に張り出した台地尾根の先端部近くに立地する。

縄文時代の遺跡では、ほかに塞ノ神式土器、曾畠式土器、轟式土器

とともに多數の黒曜石製石鎌、石匙、磨製石斧の出土する縄文時代前期に該当する赤石牟田遺跡や塞ノ神式土器が出土する田代遺跡がある。

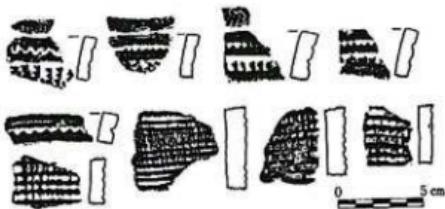
赤石牟田遺跡は中之上赤石牟田の標高約180mの南向きの緩傾斜面の畠地に立地し、前述した土器や石器のほか、石器では未完成品の石鎌も出土しているという。

なお、塞ノ神式土器はAb類に属している。

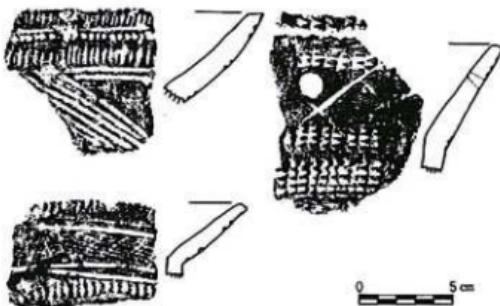
田代遺跡は、本町の南部西之田代に位置する。本遺跡から出土する塞ノ神式土器は燃糸文と貝殻文を組合せたものが出土し、塞ノ神式土器の文様構成や編年を考えるうえで参考となる好資料である。

本町における縄文時代の遺跡は、今回発掘した小牧遺跡が新たに加わることとなった。

縄文時代は、やがて縄文時代後期・晩期と統いていく。



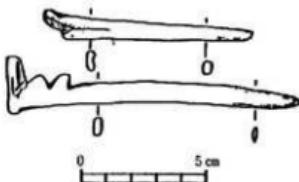
永谷山遺跡出土器



田代遺跡出土の塞ノ神式土器

縄文時代後期の遺跡としては、指宿式土器、市来式土器の出土する上瀬田遺跡や市来式土器、松山式土器、一渓式土器、西平系土器とともに石皿や石斧の出土する田尾遺跡がある。

また後述する本村丸田遺跡においても、指宿式土器、松山式土器、市来式土器等が出土している。縄文時代晩期では、黒川式土器、石斧、骨製髪飾、人骨等が出土した長崎鼻一陣貝塚が知られている。



中之下一陣遺跡出土の骨製かんざし



本村丸田遺跡出土土器

弥生時代の遺跡では、広田遺跡が著名である。

広田遺跡は平山の広田海岸に面する砂丘に立地する。昭和32~34年にかけて、金間丈夫、国分直一、盛園尚孝氏等によって調査された弥生時代前期末から後期にいたる埋葬を主体とする遺跡である。

埋葬跡からは100余体の人骨が上層と下層に分かれて検出された。上層人骨は集骨埋葬で遺体には多量の貝符が置かれていた。この貝符の1つには「山」の字の彫刻のある貝符が検出された。下層人骨は極端な屈肢の姿勢で埋葬されていて、特に女性骨では貝輪や貝小珠、トウテツ文の彫画のある貝符や竜佩などの貝製装飾品を装着していた。

弥生時代の遺跡では、他に本村塚の峯遺跡、本村丸田遺跡、本村字都遺跡、浜田崖遺跡、長谷遺跡がある。

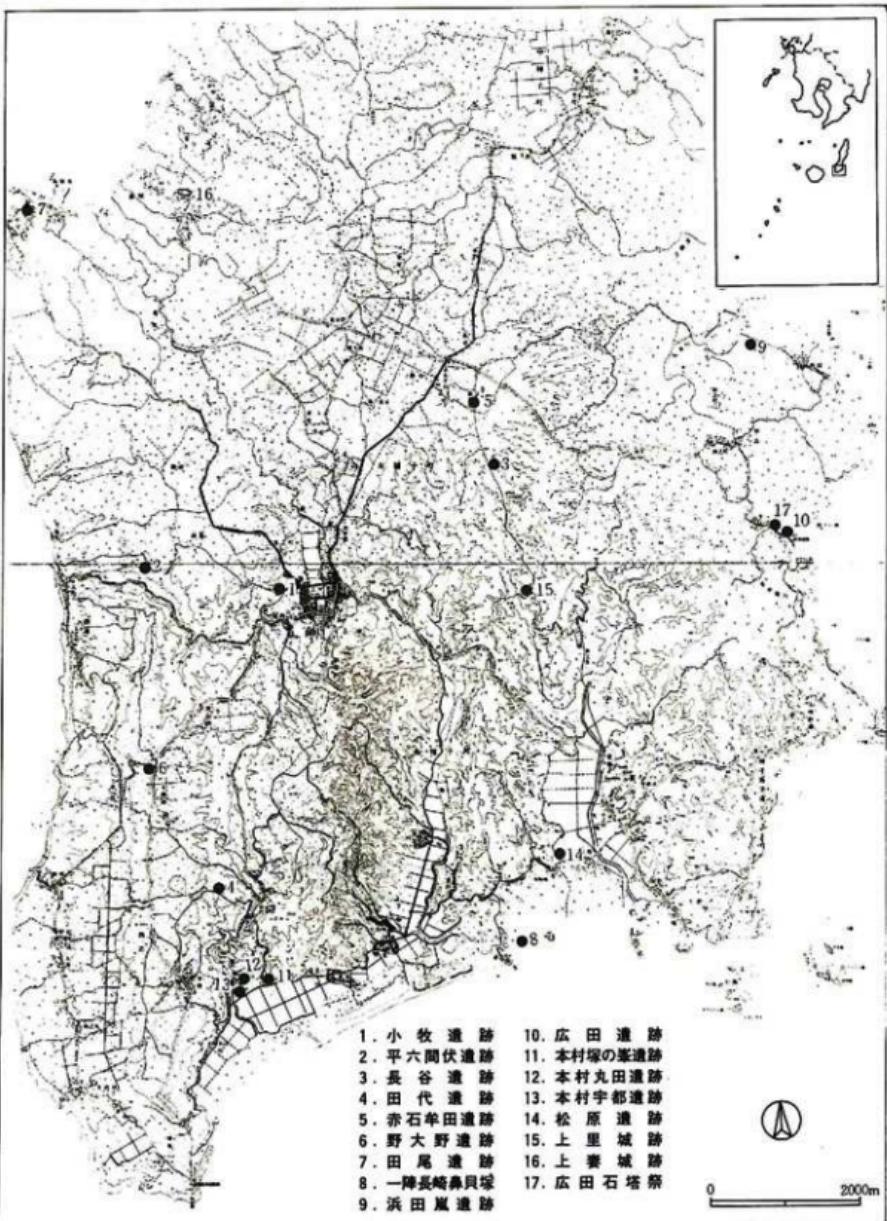
歴史時代になると、昭和60年に発掘調査が行われた本村丸田遺跡を挙げることができる。

本村丸田遺跡は、2基の掘立柱建物跡の遺構の他、土師器、須恵器、青磁、白磁、染付等の遺物が出土した。これらの遺物から本遺跡の遺構は平安時代前期頃から後期頃の建物跡と考えられ、本町における歴史時代の1ページに新たな資料を提供することとなった。

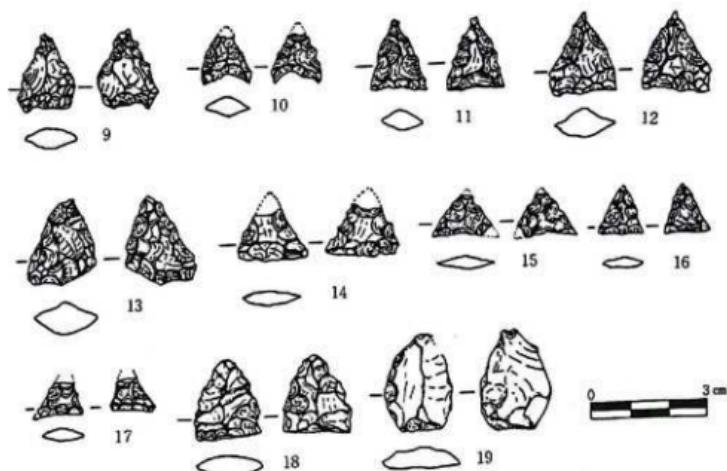
以上、本町における地理的環境及び先史時代の遺跡を概観した。



本村丸田遺跡出土の土器



第1図 小牧遺跡・平六間伏道跡及び周辺遺跡



### 赤石牟田遺跡出土石器

\*実測図は越慶男氏「本村丸田遺跡」を使用した。

表1 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等
1	小牧				
2	平六間伏				
3	長谷	長谷	台地	繩(早)	吉田式土器
4	田代	西之	タ	繩(前)	塞ノ神式土器
5	赤石牟田	長谷、赤石牟田	タ	タ	曾烟式、塞ノ神土器 打削石斧、磨研石破片
6	野大野	西之	タ	繩(後)	市来式土器 磨製石斧、磨石
7	田尾	島間、田尾	タ	タ	市来式土器、磨製石斧 ナリ石、磨石、石盤
8	一陣長崎鼻貝塚	中之下	砂丘	繩(晚)	土器(黒川式)磨製石斧、骨製磨り棒 骨頭、貝殻、人魚骨、貝類
9	浜田嵐	平山、平田嵐	平地	弥(中)	弥生式土器片(須玖式)
10	広田	平山、広田	砂丘	弥(中) (後)	弥生式土器、人骨 100 体余、貝製品 核鍛錠、石錐、鉄製釣針、獸骨貝類
11	本村塚の峯	西之本村、塚の峯	斜面地	弥(後)	弥生式土器片
12	本村丸田	西之本村、丸田	畑	タ	タ
13	本村字都	西之本村、字都	斜面地	タ	タ
14	松原	茎永、松原	台地	タ	タ
15	上里城跡	茎永、上里	タ		
16	上妻城跡	島間、向方	タ		
17	広田石塔祭	平山、広田			



下層人骨の出土状況



下層人骨に着装のトウテツ文様貝符



双性の巫と考えられる男性人骨

下層人骨の副葬品



(盛園尚孝氏提供)

広 田 遺 跡

## 第三章 小牧遺跡

### 第1節 調査の概要

遺跡は農免農道整備事業の抗風地区の上中側の入口の路線上にあり、上中の市街地から西へ直線距離でおよそ700mの地点に位置している。標高およそ130mの台地上に遺跡は所在し、台地は遺跡付近からゆるやかに傾斜して、谷部を流れる小川まではおよそ200mの距離である。

調査はまず、現道両脇の工事により削平される畑に2×4mのトレンチを片側に2箇所ずつ設定して掘り下げを実施した。その結果、道路の北側部分の1トレンチでは、一部上の層は削平されているものの、縄文時代の遺物包含層が確認され、遺物が出土した。3トレンチでも一部削平されているものの、1トレンチと同様に遺物包含層が確認され、遺物が出土した。一方、道路の南側の2箇所のトレンチのうち2トレンチは、遺物包含層の上部が一部削平されており、集石の一部と考えられる礫のまとまりが確認されたのみであった。遺物は出土しなかった。4トレンチにおいては、包含層は確認されたが、遺物の出土はわずかであった。道路部分については現道が包含層より低い位置をとっていることが明らかになった。このようにして遺物包含層が残存するのは主として現道の北側の畑であることが確認されたので、工事により削平される部分については拡張して調査を実施することにした。

拡張部分の調査は道路にそって、ほぼ東西にA、B、C……G、南北に1、2として10×10mのグリッドを設定して掘り下げを行った。その結果、IV層から縄文時代の土器片、石器等が出土した。遺物は道路の北側の1区の列に多く出土し、南側部分は少なかった。E、F-2区では包含層の上部が削平されており、確認調査の2トレンチで集石と考えられる遺構を検出したのみで、遺物は出土しなかった。

### 第2節 層位

層位はI層からVI層まで確認された。

I層 深褐色を呈した表土である。場所によっては下のIV層まで搅乱されており、III、IV層がブロック状に混ざっている。

II層 黒褐色土。やや粘質である。D-1区のごく一部にみられるのみであり、他の場所では削平されている。

III層 黄褐色土。鬼界カルデラを噴出源とするアカホヤと呼ばれる火山灰層である。E、F-2区では削平されており、確認されない。

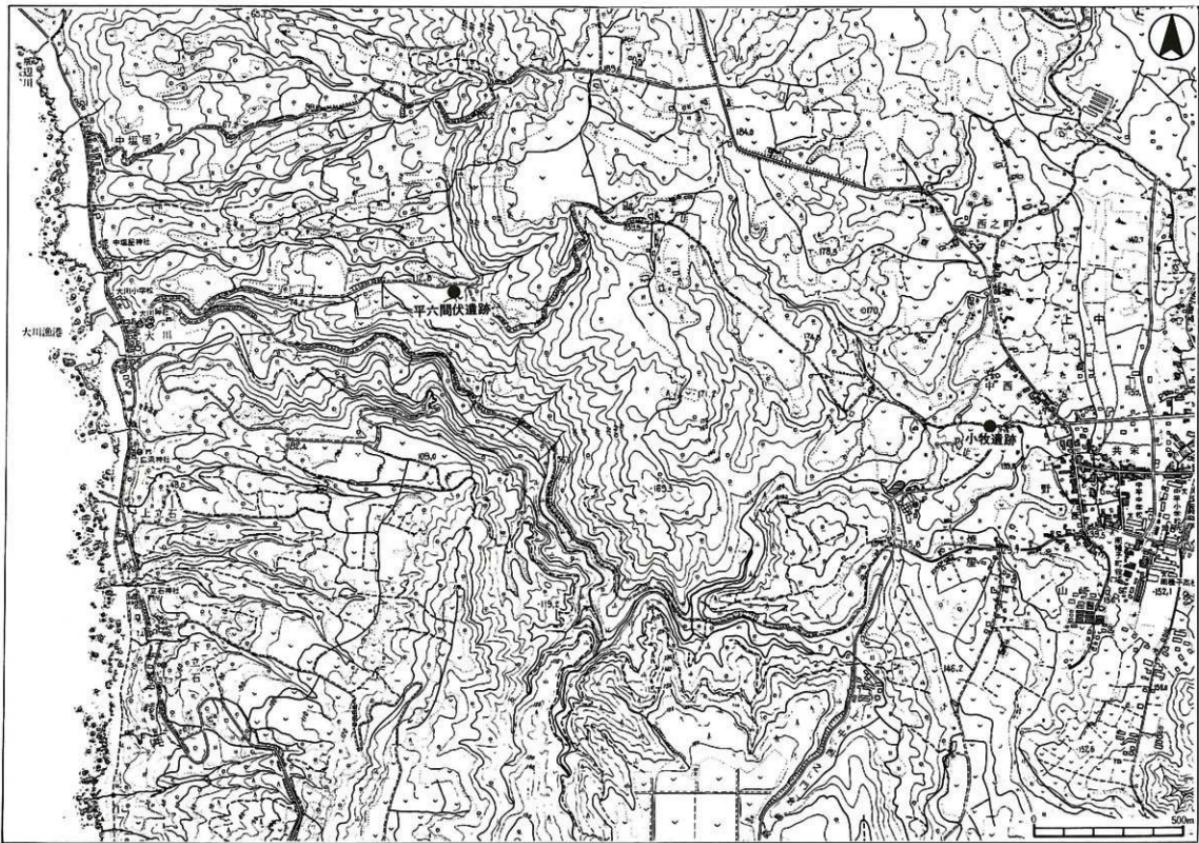
IV層 淡茶褐色土。粘質である。縄文時代早期の遺物を包含する。

V層 淡黒褐色土。やや粘質である。やや硬質である。

VI層 茶褐色土。やや粘質である。

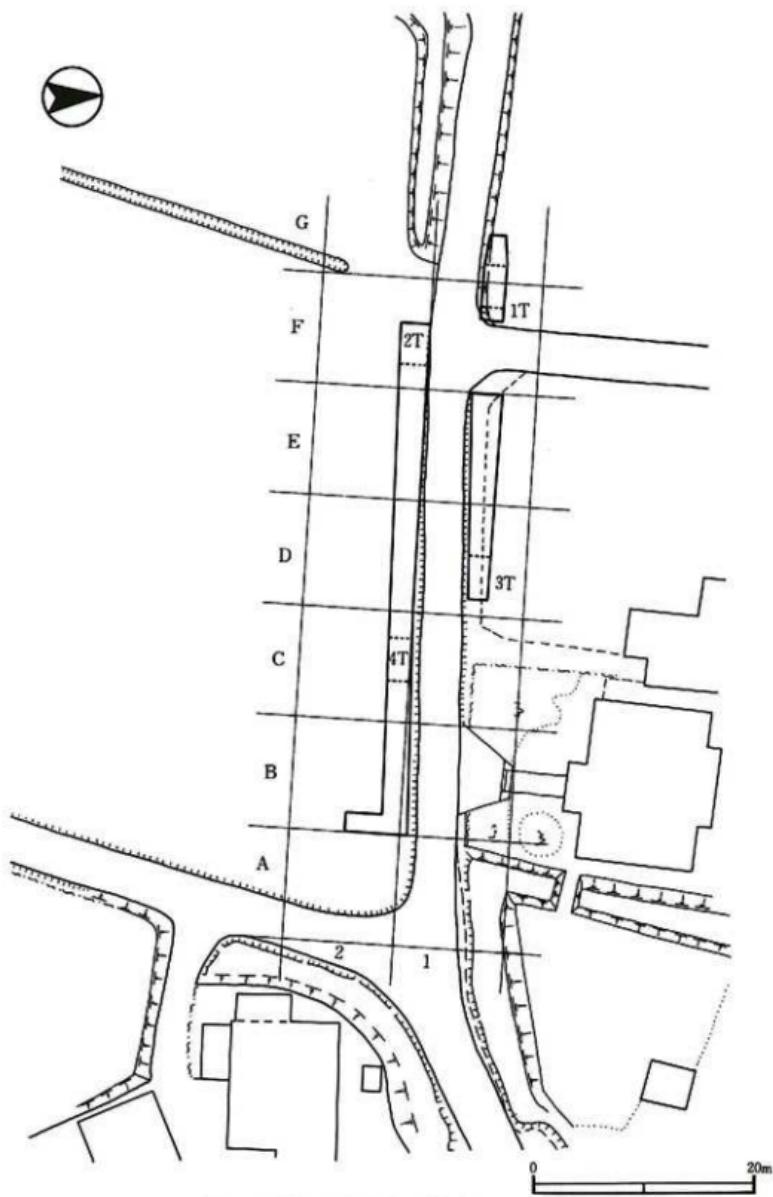
以上が標準的な層位であるが、II層はD-1区のごく一部において残存するのみで他では見られなかった。E、F-2区ではIII、IV層が耕作等により削平されていることが確認された。





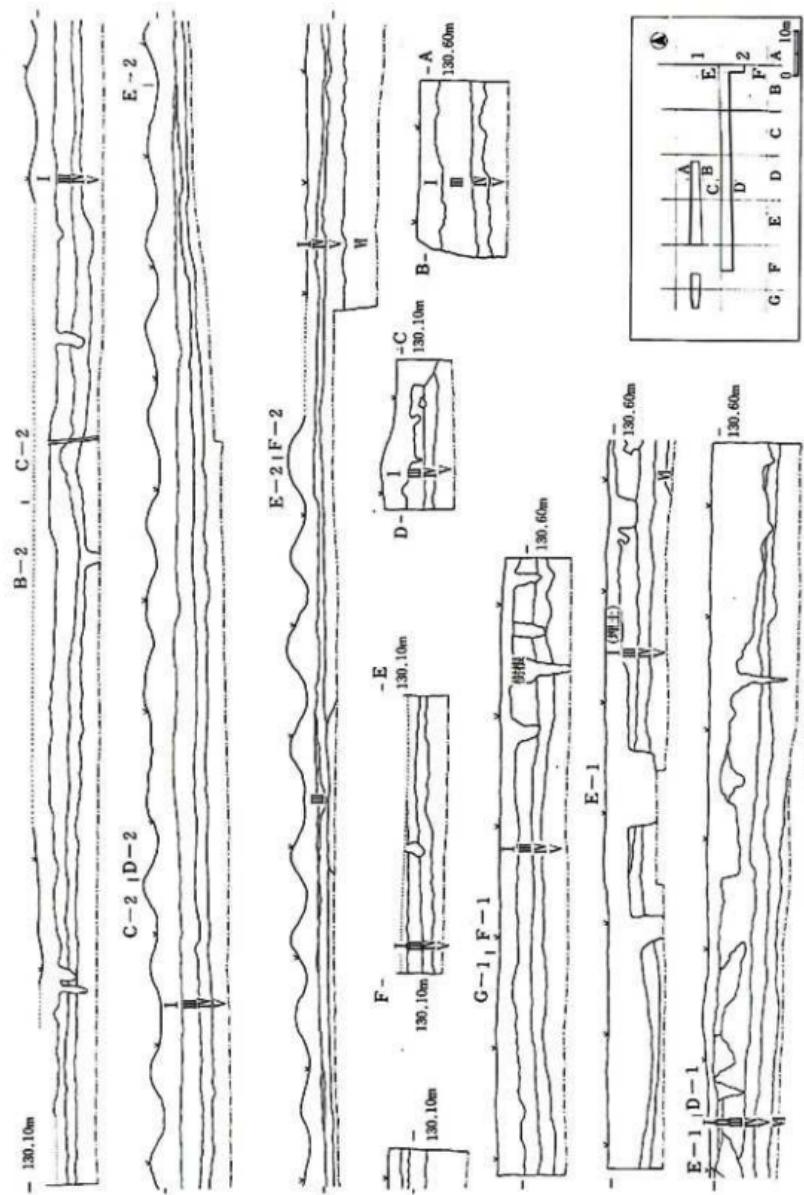
第2図 遺跡と周辺の地形図





第3図 周辺の地形及びグリッド配置図

第4図 土層断面図



### 第3節 遺構(第5図)

遺構はF-2区に集石を1基検出したのみである。IV層からの検出であるが、この場所はII, III層は確認されず、耕作等により、IV層上部まで削平されている。このため礫はなくなっているものもあると考えられる。礫の数は少量であったが、中には明らかに火を受けたとみられるものもある。しかし、周辺には炭化物等はみられなかった。掘り込み等は確認されなかった。

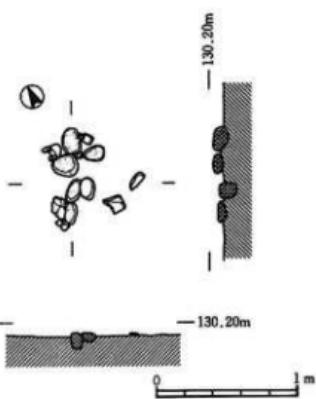
### 第4節 遺物

遺物はそのほとんどがIV層から出土したものであるが、中に一部表層からのものも同化した。

#### 1. 土器

出土した土器は全て同一形式と考えられるもので、平底の底部から、円筒形になるとを考えられる胴部となり、頸部で「く」字に開き、口縁部はラッパ状に大きく外反する器形となるものである。文様は網目状捺糸文、沈線文、連点文等を施文している。

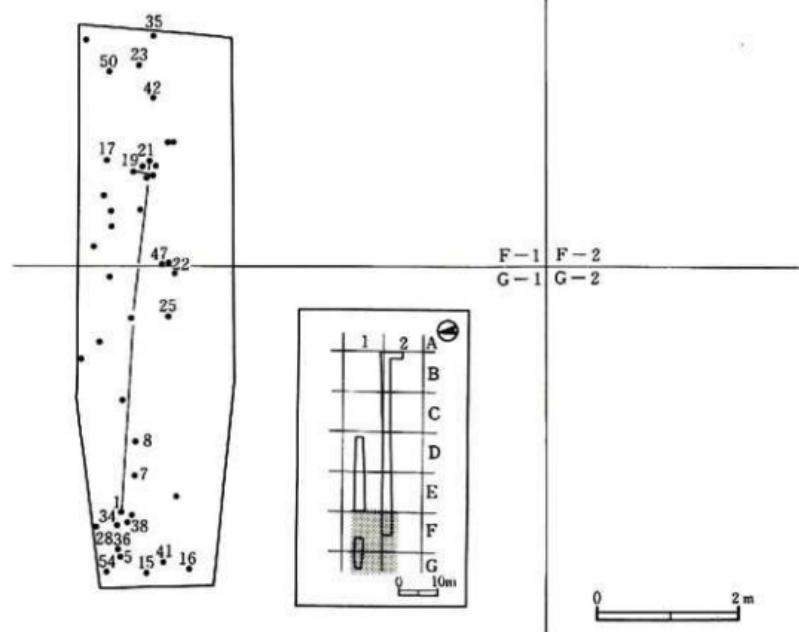
1~3は口縁部から頸部及び胴部にかけての破片である。口縁部はやや内湾ぎみであるが、ほぼ直線的に大きく外反している。いずれも口唇部に刻み目を施文するが、1, 2は口唇部平坦面に施文し、3は口唇部と外面の稜の部分に連点状に施文する。1は口縁部、頸部、胴部に数条の沈線を巡らしており、その上下に連点文を施文する。胴部には捺糸文を施文しており、Rの捺糸を用い、單軸絡繩体第2類と考えられる施文原体である。原体の長さは約1cm程度と考えられる。2, 3は連点文がみられず、沈線文と網目状捺糸文のみである。3の沈線は2に比して浅い。3は口縁部にも捺糸文を施文しており、原体はRの捺糸を用い、右巻き後左巻きしたるものである。2, 3は外面にスヌの付着がみられる。4~8は口縁部の破片であり、いずれも口唇部に刻み目を施文するが、4, 6は内面及び外面との稜の部分の2箇所に施文し、5, 7は外面との稜の部分の1箇所に施文している。捺糸文はみられずに、7以外は沈線文のみの施文がみられる。9は外反する口縁部の一部と考えられる。Lの捺糸を用いた網目状捺糸文施文後、横位の沈線文を数条巡らしている。捺糸の巻きは不明である。外面にスヌの付着がみられる。10~16は「く」字状に外反する頸部である。10~13は同一個体と考えられるもので、頸部に数条の沈線文を巡らしており、胴部には網目状捺糸文を施文する。原体はLの捺糸を用い、右巻き左巻きを交互に繰り返している。原体の長さは9mm程度とみられる。14は口縁部まで捺糸文を施文する。Rの捺糸であるが、巻きは明らかでない。16は沈線のみである。10, 12, 13は外面にスヌの付着がみられる。17~40は胴部の破片である。文様は捺糸文施文後、数条の沈線を巡らして、その上部、あるいは下部に、横位の連点文を施文するもの(17~19, 27), 捺糸



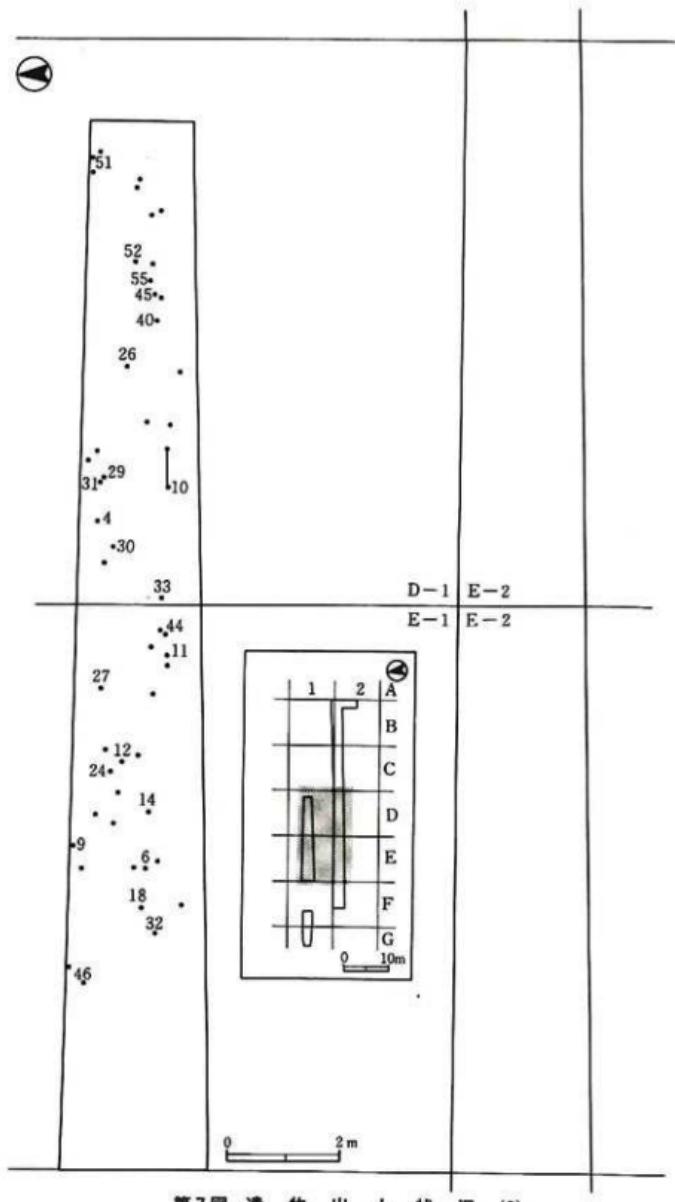
第5図 集 石



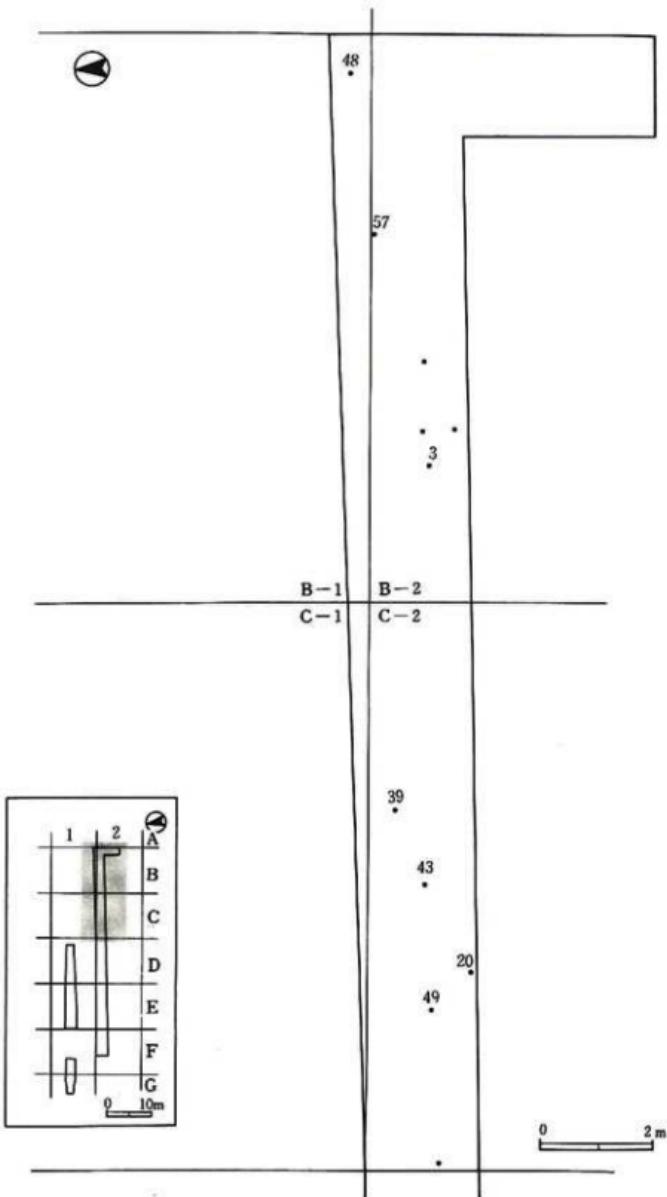
集石



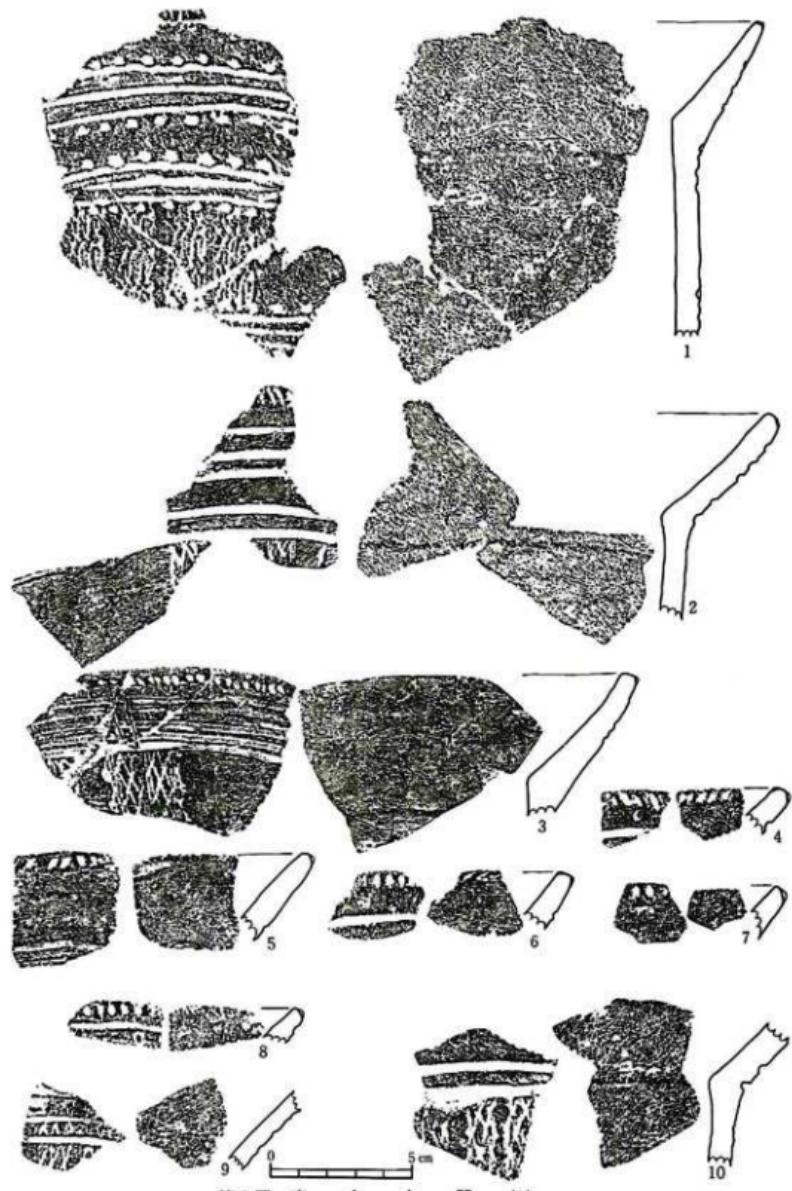
第6図 遺物出土状況 (1)



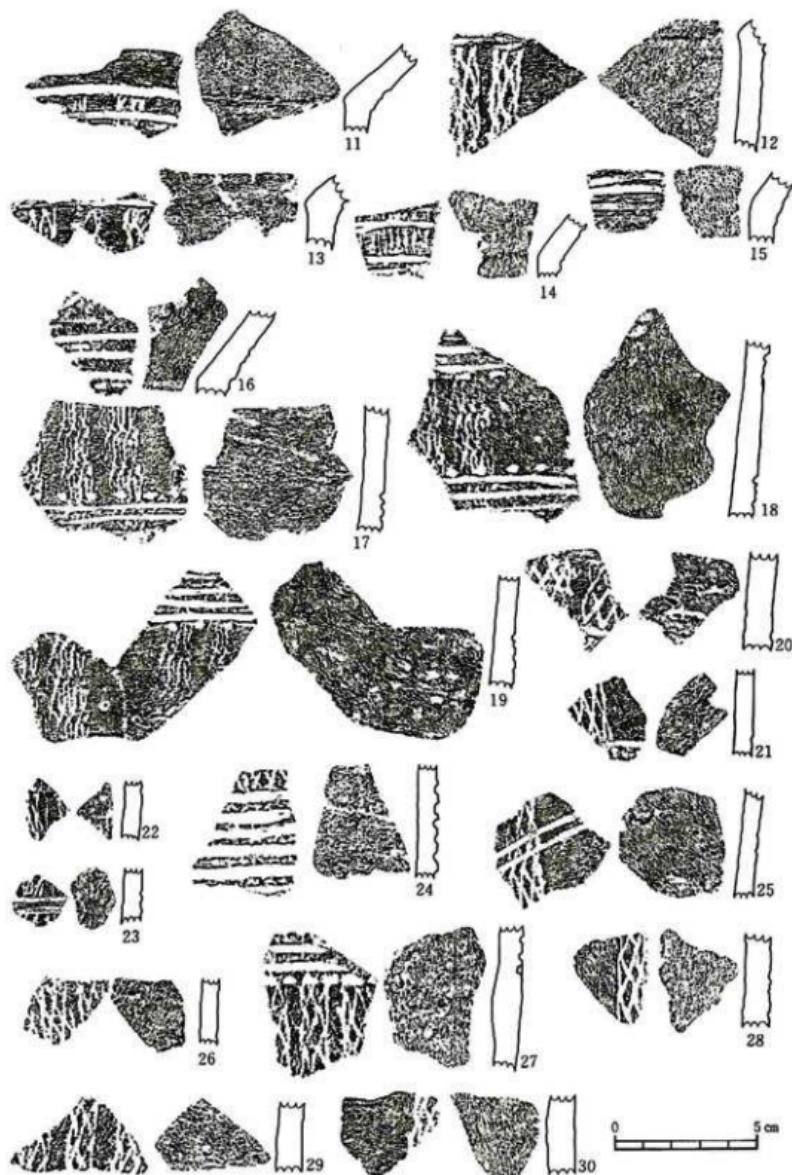
第7図 遺物出土状況 (2)



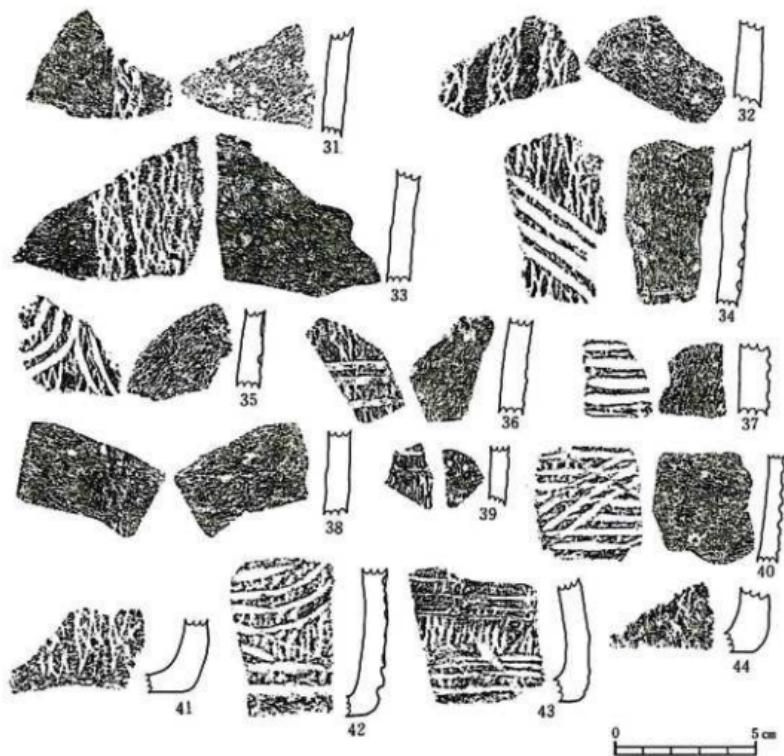
第8図 遺物出土状況 (3)



第9図 出 土 土 器 (1)



第10図 出土土器 (2)



第11図 出 土 土 器 (3)

文施文後、横位の沈線を巡らしているもの(20~24, 36, 37, 39), 網目状撚糸文施文後、斜位の沈線文を施文するもの(25, 34), 撥糸文施文後、横位の沈線を施文し、さらに斜位の沈線を施すもの(40), 網目状撚糸文施文後、沈線による曲線文を施すもの、網目状撚糸文のみのもの(26~28, 33, 38)等がある。文様はこのように様々であるが、少破片が多いため全体の文様は明らかでなく、これらの文様のうちいくつかは組み合せて施文されていることも考えられる。撚糸の撚は17~23はRであり、25~36はLである。他は明らかでない。撚糸の軸への巻きについてみると、17~19は單軸絡繩体第2類と思われるものであり、20~22, 25, 26は右巻き後左巻きしている。27~34は右巻き左巻きを交互に繰り返しているものである。23, 24, 30~40ははっきりしない。18, 26, 32, 38は外面にスヌの付着がみられる。41~44は底部である。いずれも平底と考えられる底部から円筒型と考えられる胴部となるものである。40, 44は網目状撚

表2 出土土器一覽表

地點 番号	遺物 番号	出土区	層	胎 土	燒成	色 調	内面彫影	文 標	備考 (施文原体等)
第9回	1	G-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文、通点文	R、單輪鉗輪体第2類?
+	2	青 粉	一	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	L、交互
+	3	B-2	青	石英、長石、角閃石、	良	淡黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	R、右→左
+	4	D-1	青	石英、長石、角閃石、	良	淡黃褐色	ナデ	沈綸文	
+	5	G-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	淡黃褐色	ナデ	沈綸文	
+	6	E-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	沈綸文	
+	7	G-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ		
+	8	G-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	沈綸文	
+	9	E-1	青	石英、長石、角閃石、	良	淡黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	L、?
+	10	D-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	L、交互
第10回	11	E-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	L、?
+	12	E-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	淡黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	L、交互
+	13	青 粉	一	石英、長石、角閃石、	良	淡黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	L、交互
+	14	E-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	R、?
+	15	G-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	?	沈綸文	
+	16	G-1	青	石英、角閃石、細鐵	良	黃褐色	ナデ	沈綸文	
+	17	F-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	淡黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文、通点文	R、單輪鉗輪体第2類?
+	18	E-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	茶褐色	ナデ	撫条文、沈綸文、通点文	R、單輪鉗輪体第2類?
+	19	F-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	淡黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文、通点文	R、單輪鉗輪体第2類?
+	20	C-2	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	淡黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	R、右→左
+	21	F-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	R、右→左
+	22	G-1	青	石英、長石、角閃石、	良	赤褐色	?	撫条文、沈綸文	R、右→左
+	23	F-1	青	石英、長石、角閃石、	良	暗茶褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	R、?
+	24	E-1	青	石英、長石、角閃石、	良	淡黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	R、?
+	25	G-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	L、右→左
+	26	D-1	青	石英、長石、角閃石、	良	淡茶褐色	ナデ	撫条文	L、右→左
+	27	E-1	青	石英、長石、角閃石、	良	淡黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文、通点文	L、交互
+	28	G-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文	L、交互
+	29	D-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文	L、?
第11回	30	D-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	黃褐色	ナデ	撫条文	L、交互
+	31	D-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	明黃褐色	ナデ	撫条文	L、交互
+	32	E-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	黃褐色	ナデ	撫条文	L、交互
+	33	D-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	黃褐色	ナデ	撫条文	L、交互
+	34	G-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	L、交互
+	35	F-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	茶褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	L、?
+	36	G-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	L、?
+	37	青 粉	一	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	
+	38	G-1	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文	???
+	39	C-2	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	??
+	40	D-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	淡黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	
+	41	G-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	淡黃褐色	ナデ	撫条文	L、交互
+	42	F-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	L、?
+	43	C-2	青	石英、長石、角閃石、	良	黃褐色	ナデ	撫条文、沈綸文	???
+	44	E-1	青	石英、長石、角閃石、細鐵	良	黃褐色	ナデ	撫条文	L、?

糸文のみであり、42は撚糸文施文後、沈線による直線文、曲線文を施文している。43は撚糸文施文後、やや浅い沈線を数条巡らしている。これらについては、小破片のためその全体的な文様構成は明らかでない。撚糸はいずれもLを用いており、その巻きは、41が右巻き左巻きを繰り返しているものであり、他は明らかでない。42は外面にススの付着がみられる。

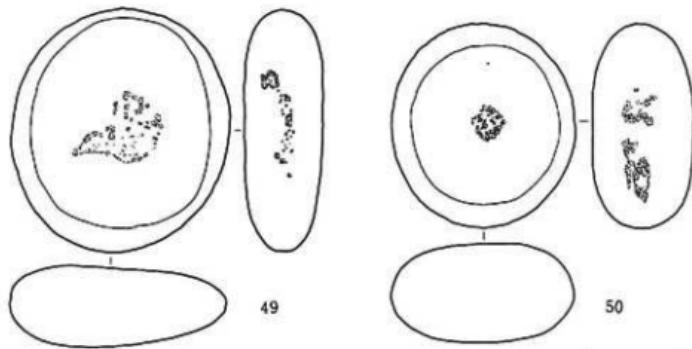
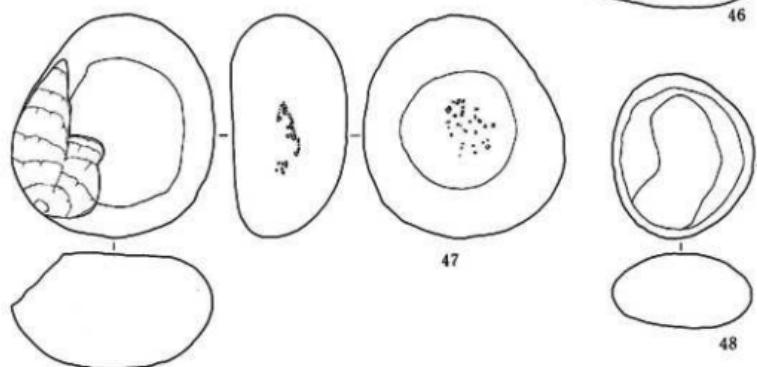
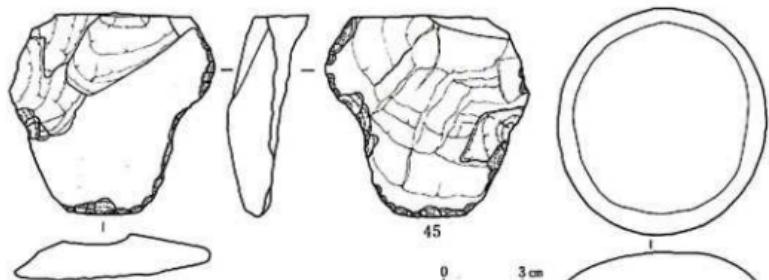
## 2. 石 器

石器も土器と同様ほとんどがIV層出土であるが、一部表層のものも図化した。

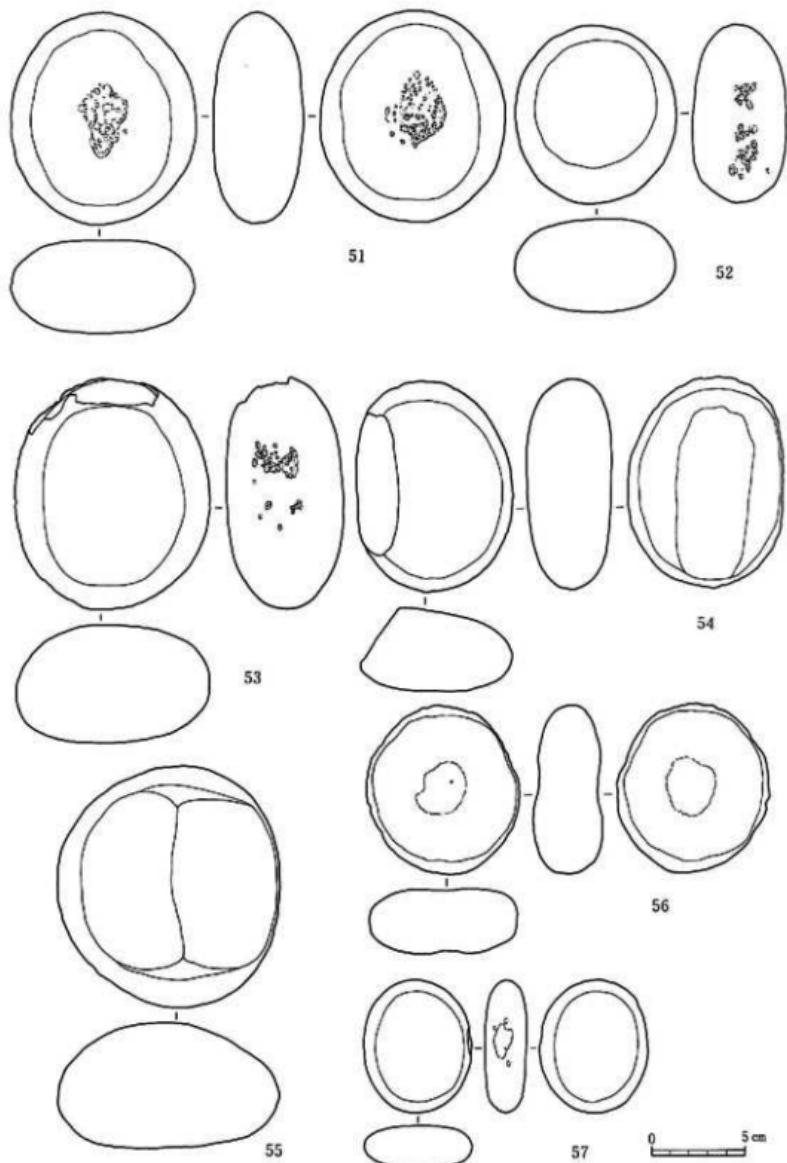
45は砂岩の剥片を素材としたもので片面には自然面を、片面には主要剥離面を残し、周縁に細かい剥離面を加えているものである。46~57は全て磨石である。しかし、中には他にも敲石等として使用しており、それぞれ以下の場所に使用痕が認められる。47は片面と1側面、48は1側面、49は両面と周縁、50は片面と周縁、51は両面、52は1側面、53は1側面、56は両面、57は1側面。中でも56は両面も凹んでおり凹石となっている。石材は56のみが花崗岩で、他は砂岩である。

表3 出土石器一覧表

捕獲番号	遺物番号	出土区	層	器種	石材	重量	備考
第12図	45	D-1	IV		砂岩	110g	
タ	46	E-1	IV	磨石	砂岩	1,050g	
タ	47	F-1	IV	磨石	砂岩	1,080g	敲石
タ	48	B-1	IV	磨石	砂岩	311g	敲石
タ	49	C-2	IV	磨石	砂岩	920g	敲石
タ	50	F-1	IV	磨石	砂岩	830g	敲石
第13図	51	D-1	IV	磨石	砂岩	790g	敲石
タ	52	D-1	IV	磨石	砂岩	586g	敲石
タ	53	表採	—	磨石	砂岩	1,125g	敲石
タ	54	G-1	IV	磨石	砂岩	575g	
タ	55	D-1	IV	磨石	砂岩	1,345g	
タ	56	B-2	IV	凹石	花崗岩	387g	磨石
タ	57	B-2	IV	磨石	砂岩	126g	敲石



第12図 出 土 石 器 (1)



第13図 出 土 石 器 (2)

## 第IV章 平六間伏遺跡

### 第1節 調査の概要

平六間伏遺跡は、農免農道整備事業抗風地区の路線上の大川側の入口より約1km東の地点に位置している。抗風集落のある台地から舌状に西海岸へ延びる丘陵上の小台地の標高約102～105mの場所である。遺跡の北側は急崖となり、比高差約6mで小川の脇の水田となる。遺跡の現況は現道より一段高い畝であり、西側へゆるやかに傾斜している。

調査は遺跡の西側の標高約102mの地点から、東側は標高約105mの地点まで、合計4箇所のトレンチを設定して実施した。2トレンチではV層まで、他のトレンチではIV層まで掘り下げたが、遺構・遺物等は確認されなかった。1、2トレンチの畝から少量の遺物を表採した。

### 第2節 層位

層位は各トレンチともほぼ同様であるが、II層は4トレンチにおいてのみ確認された。

I層 褐色の耕作土。3、4トレンチでは60～90cmとやや厚い。

II層 暗茶褐色土。調査区東側の4トレンチのみで確認された層である。

III層 黄褐色土。鬼界カルデラを噴出源とする、アカホヤと呼ばれる火山灰層である。

IV層 淡茶褐色土。場所によってはやや乳白色に近い色調を呈し、やや粘質をおびる。

V層 茶褐色土。粘質である。

### 第3節 各トレンチの調査

#### 1. 1トレンチ

調査区のいちばん南側の標高約102mの地点に2×4mの大きさで設定した。IV層まで掘り下げたが、II層は確認されなかった。III層は色調のちがいにより、a・bの2層に分けた。

遺構・遺物等は出土しなかったが、このトレンチの周辺から少量の遺物を表採した。

#### 2. 2トレンチ

1トレンチと同じ畝の東側約10mの地点に2×4mの大きさで設定した。一部V層まで掘り下げたが、II層は確認されなかった。

この2トレンチ及び1トレンチを設定した畝は以前、地下げを行っており、周辺の遺物はその時のものと考えられる。

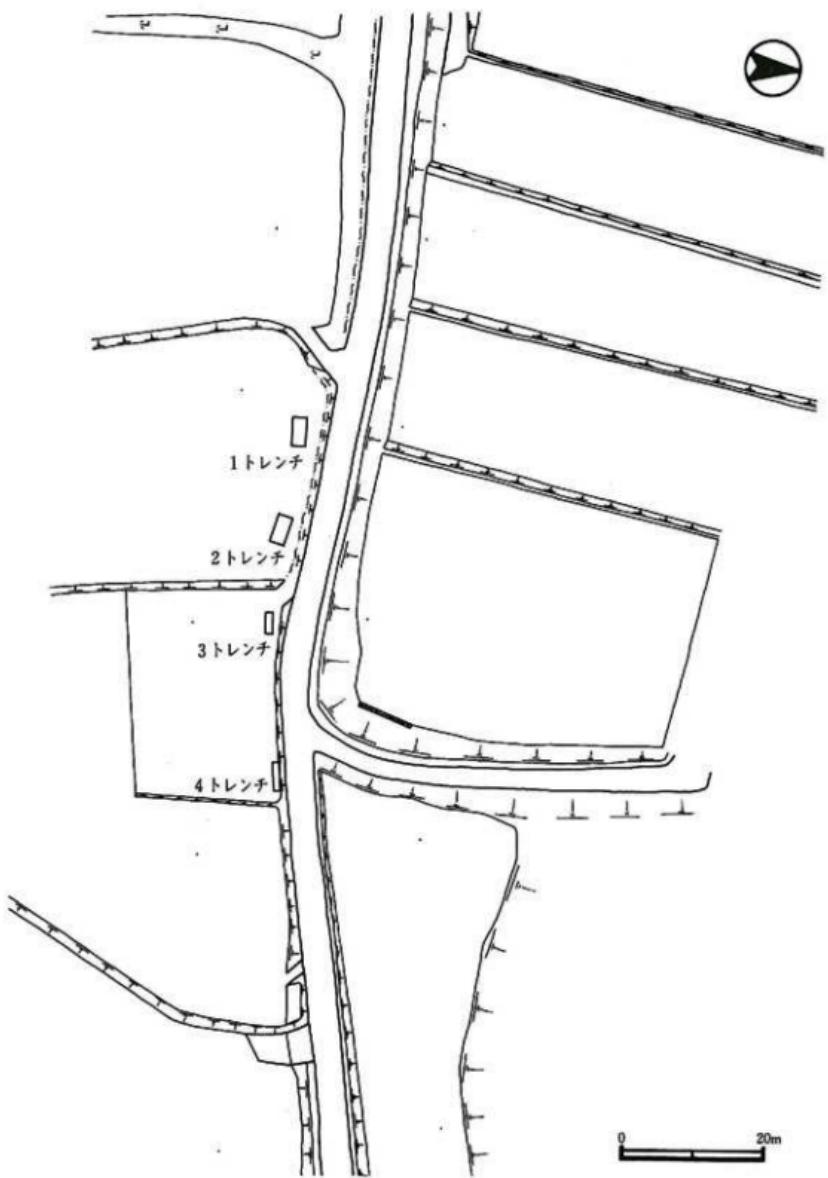
遺物包含層は確認されず、遺構・遺物等は出土しなかった。

#### 3. 3トレンチ

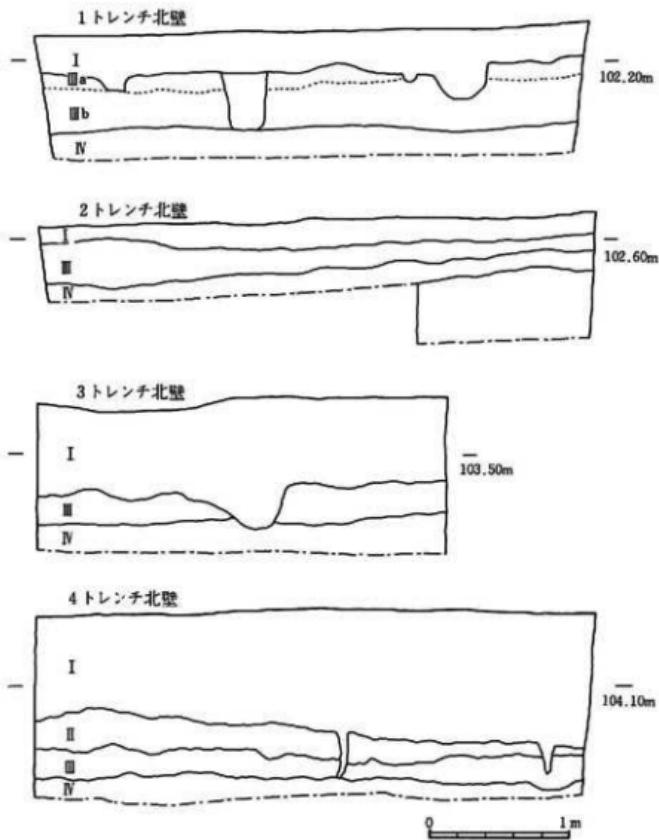
3トレンチは2トレンチの東側の一段高い畝の標高約104mの地点に1×3mの大きさで設定した。IV層まで掘り下げたが、II層は確認されなかった。表層が50～70cmとやや厚い。

遺構・遺物等は確認されなかった。

#### 4. 4トレンチ



第14図 周辺の地形及びトレーンチ配置図



第15図 土層断面図

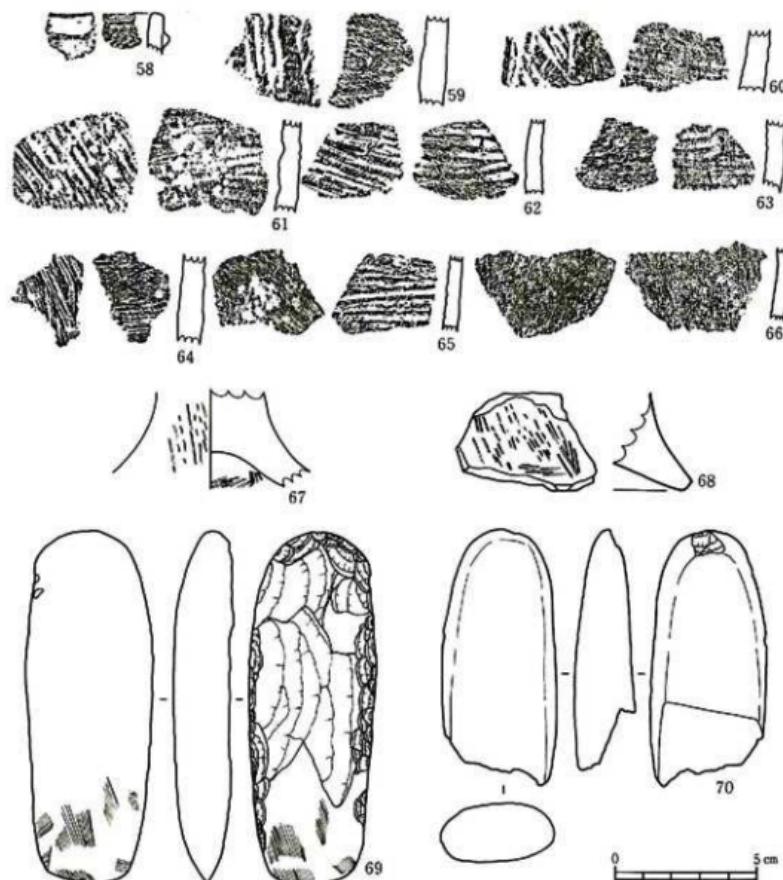
4トレンチは3トレンチと同じ畝の北側約20mの地点に1×4mの大きさで設定した。層位はIV層まで確認した。このトレンチの層位は平六間伏遺跡の標準土層に近い堆積状態であった。遺構・遺物等は確認されなかった。

#### 第4節 遺物

第16図に示した遺物はすべて1トレンチ付近で表採したものである。

58は口縁部に突帯をはりつけるものであるが、小破のため突帯の数は不明である。胎土に石英、長石を含み、焼成は良好である。59、60は外面に縦位と斜位の沈線文を施す。内面にわずかに横位の条痕がみられる。いずれも胎土に石英・長石と少量の金雲母を含み、焼成は良好で

ある。60～64は内外面ともに条痕を施す。胎土に石英、長石、角閃石を含み、焼成は良好である。65は外面はナデ、内面に条痕を施す。胎土に石英、長石を含み、焼成は良好である。66は内外面ともにナデ整形を行っている。胎土に石英、長石、角閃石を含み、焼成は良好である。67、68は變形土器の底部と考えられる。内外面ともにハケ目整形がなされる。胎土に石英、長石を含み焼成は良好である。69は頁岩を素材とする磨製石斧である。刃部はていねいに研磨され、片面は周縁からの剥離を施す。重量は160gを量る。70は石斧の基部と考えられる。頁岩を素材としている。表掲のため風化が著しく研磨痕等は明らかでない。



第16図 遺 物

## 第V章まとめにかえて

小牧遺跡出土の土器はすべて同一形式と考えられるものである。器形は口縁部がやや内湾ぎみであるものの、頸部から直線状に大きく「く」字状に外反し、胴部はほぼ円筒形に近く、底部は平底になると考えられるものである。口唇部はほぼ平坦面に仕上げ、内面あるいは外面との縫の部分に連点状に刻み目を施文している。口縁部の文様は、棒状施文具で数条の沈線文を施文するもの、沈線文の上下に連点文を施文するものがあり、1点であるが縦位に網目状撚糸文を施文するものがある。胴部の文様は撚糸文を縦位に施文するが、撚糸文には網目状撚糸文と単軸絡繩体第2類に類似すると思われる施文原体の撚糸文とがある。この撚糸文施文後、数条の横位あるいは斜位の沈線文を施文する。中にはこの沈線が曲線となっているものもある。沈線文の上下に連点文を施文するものもみられる。

このような土器は従来、塞ノ神A式aとして分類されており、知覧町石坂上遺跡、吉田町小山遺跡、加世田市椿ノ原遺跡、志布志町別府遺跡等で出土している。この塞ノ神A式aは塞ノ神式土器の中でも古くに位置づけられているが、近年、塞ノ神式土器の分類や時間的、系統的な位置づけについていくつかの検討が加えられており、今後の資料の増加に伴い、しだいにその様相も明らかにされていくものと考えられる。

施文原体についてみると、撚糸はRかLのいずれかであり、軸への巻きについては単軸絡繩体第2類に類似すると思われるものと、右巻き後左巻きしているもの、右巻きと左巻きを交互に繰り返しているものの3種類がみられる。単軸絡繩体第2類と思われるものはRのみ。右巻き後左巻きのものはRとL、右巻き左巻きを交互に繰り返しているものはLのみである。

従来、塞ノ神式土器の撚糸及び原体についてはあまりふれられていないが、枕崎市の奥木場遺跡では細かい観察がなされており、遺跡によっては撚糸及び原体の特徴が出てくる可能性も考えられ、今後は遺跡ごとの細かい観察、比較等を行う必要があろう。

石器については、磨石、敲石が圧倒的に多く、小牧遺跡の特徴となっている。

平六間伏道跡は遺物包含層が確認されず、少量の遺物が採取されたのみである。58は轟B式土器に類似する。59、60は瀬ノ上遺跡出土の埴輪土器に類似するが形式等は明らかではない。61～65の条痕文の土器は形式等は明らかでないが、縄文時代前期のものと考えられる。67、68は成川式土器の底部と考えられるものである。

註 (1) 河口貞徳「塞ノ神式土器」「鹿児島考古」6号 1972

(2) 河口貞徳「南九州の条痕土器」「石器時代」1号 1955

(3) 戸崎耕洋他「小山遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」20 1982

(4) 新東光一他「村原(椿ノ原)遺跡」「加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書」1977

(5) 立神次郎他「別府(石浦)遺跡」「志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書」1979

(6) (1)に同じ

(7) 新東光一「塞ノ神式土器」「縄文文化の研究」3 雄山閣 1982

多々良友博「塞ノ神式土器群の文様構成—その分類と変遷の位置づけ—」「塞ノ神式土器」1985

(8) 宮田栄二他「奥木場遺跡」「枕崎市埋蔵文化財調査報告書」(3) 1987

図 版





小牧遺跡遠景



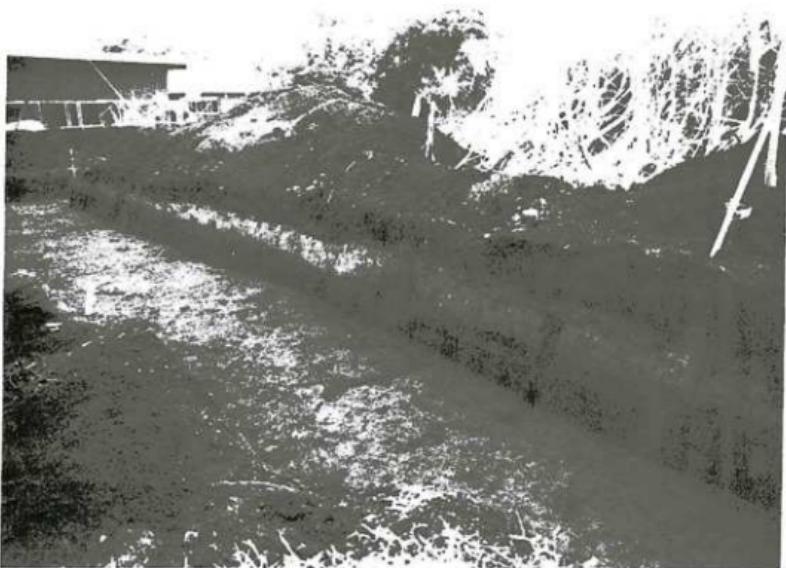
平六間伏遺跡遠景



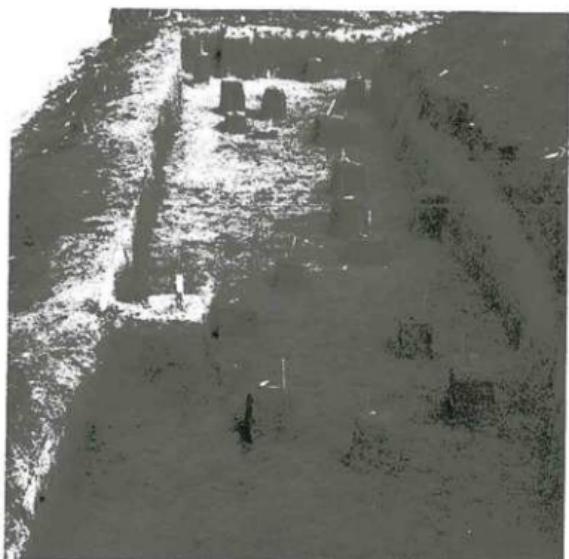
遺跡近景



土層断面



土層斷面



遺物出土狀況



石 集



況 狀 土 出 器 土



調　　調　　風　　景（小牧遺跡）



土層断面  
(平六間伏遺跡)

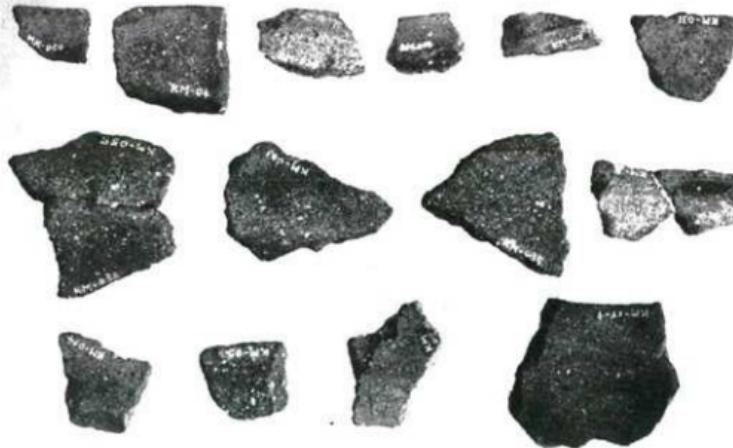
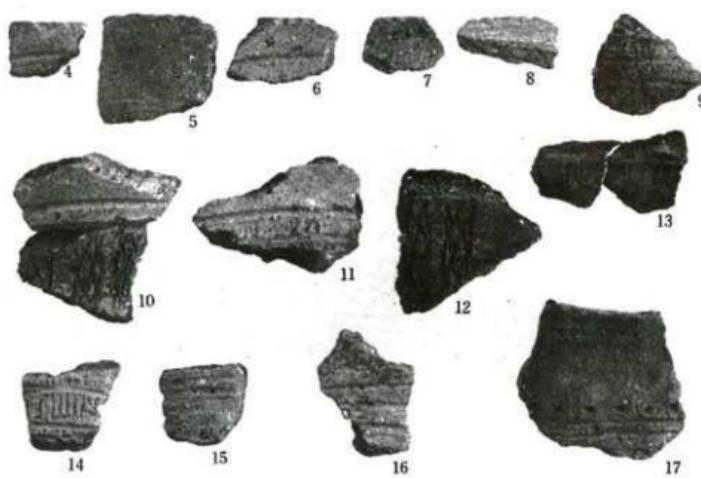


調査風景  
(平六間伏遺跡)

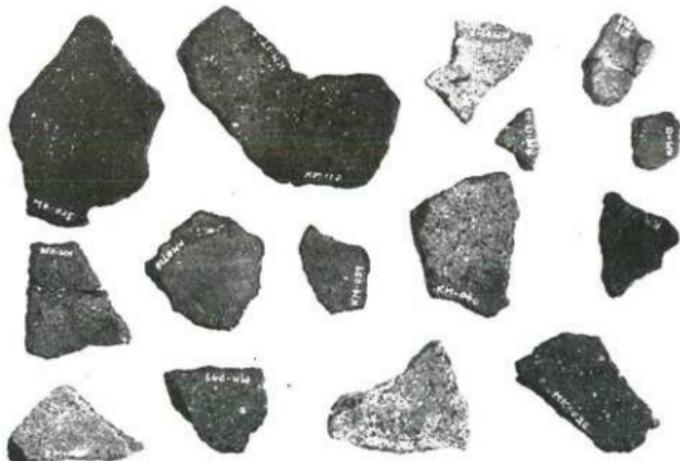
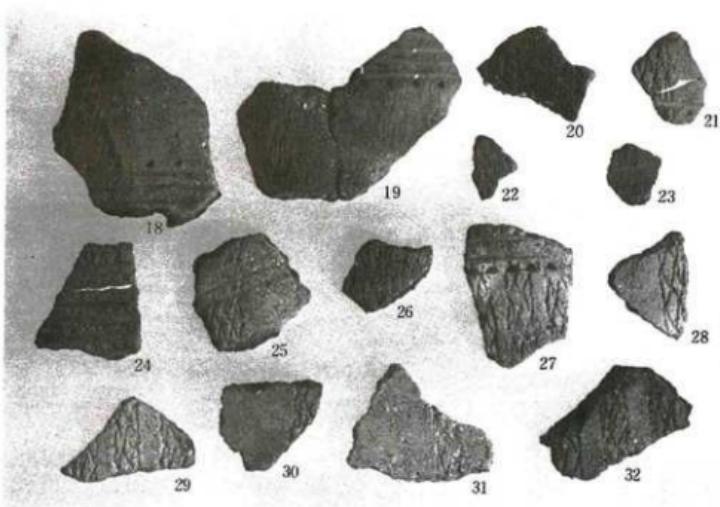




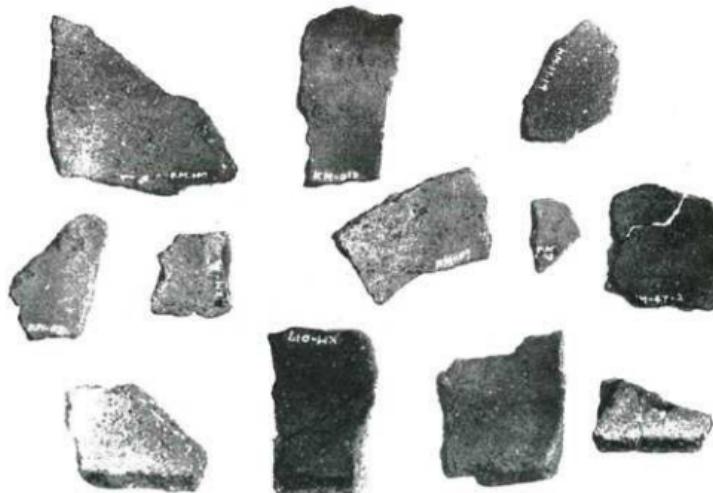
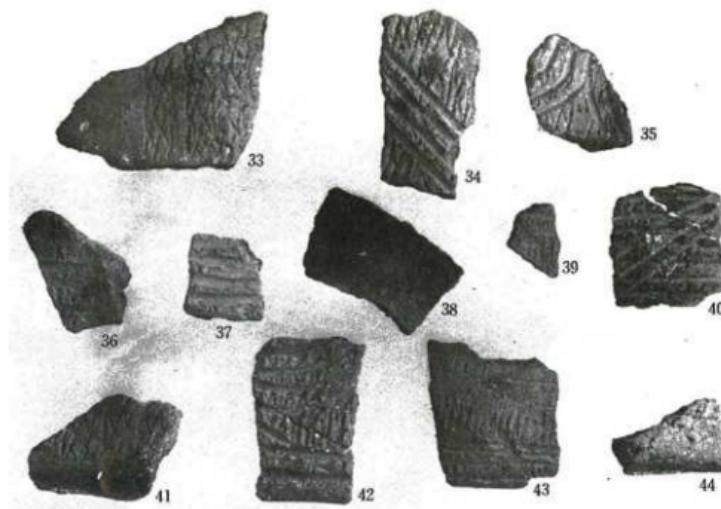
出 土 土 器 (1) 上表、下裏



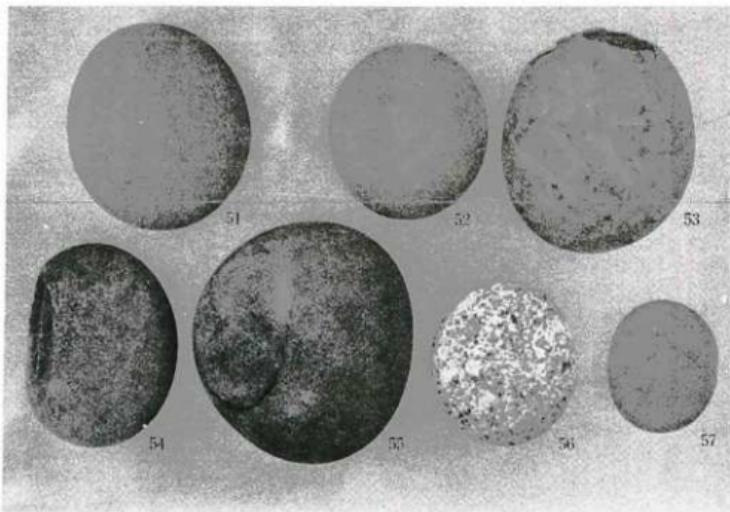
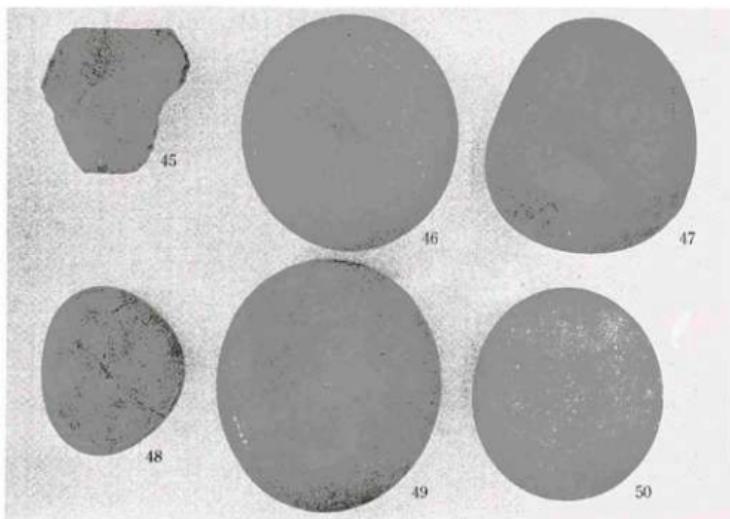
出 土 土 器 (2) 上表、下裏



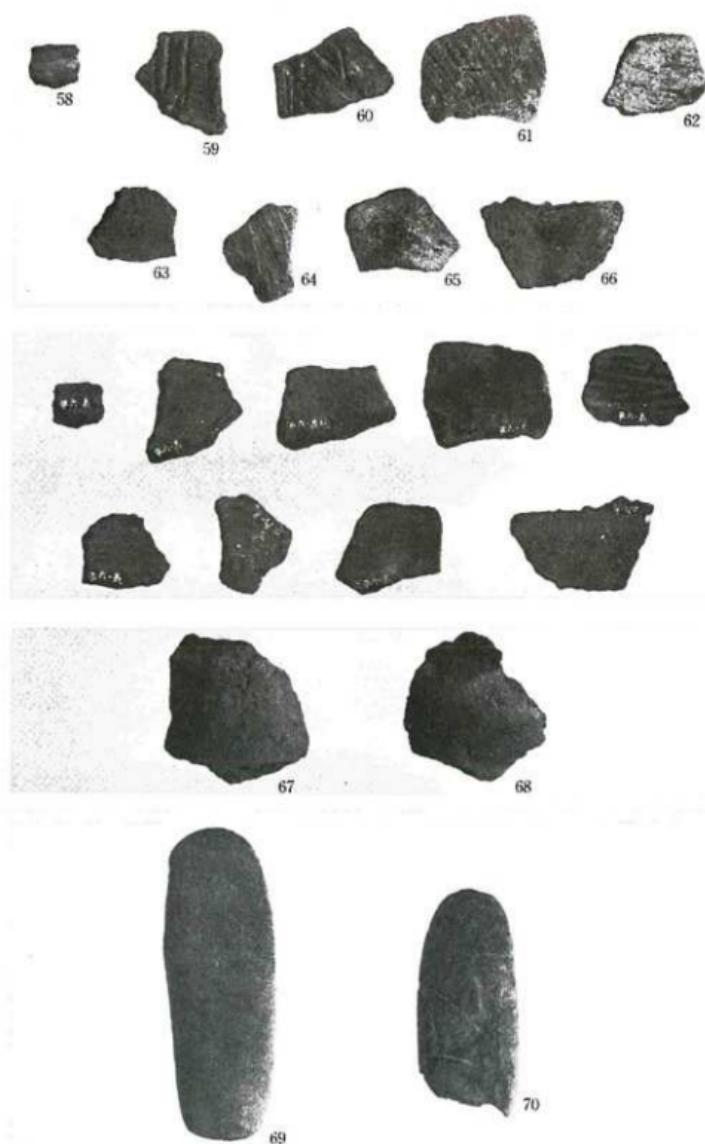
出 土 土 器 (3) 上表、下裏



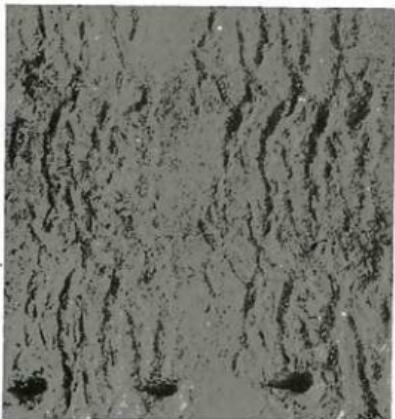
出 土 土 器 (4) 上表、下裏



出土石器



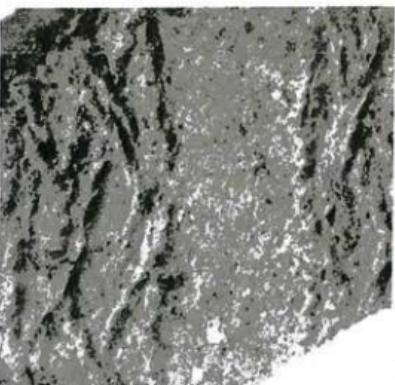
遺 物



25



17



28



29



30

文様拡大図

## あとがき

広田遺跡に代表される南種子町も、今やロケットの町である。古代と宇宙が異和感なく同居する温暖な町は、人情も豊かである。

小牧遺跡・平六間伏遺跡は、このような町に所在し、温かい人柄の人々の手で発掘されたものである。

海を距てた屋久島の高い嶺に当たった雲は、雨雲となり遺跡に良く降りそそいだ。しかし、この雨にも負けずに頑張って下さった方々。台風襲来にそなえた日も、わがごとのように走りまわって準備して下さった方々。ほんとうにありがとうございました。

また、本報告書ができるまで、整理作業に当たられた県文化課重富収蔵庫の皆さんをはじめ関係各位の皆さんに、お礼を述べてむすびとします。

### 発掘作業員

上妻仁之・古市ツギエ・岩崎加代子・廣浜とち子・川元信子・牧秀子・山田涼子・原セツ子・宮チズ子・冷水まり子

### 整理作業員

高瀬孝子・浜田幸江・松元雅子・下畠節子・前之園俊子



南種子町埋蔵文化財調査報告書(2)

**小牧遺跡・平六間伏遺跡**

発行日 昭和63年3月

発行者 南種子町教育委員会  
鹿児島県熊毛郡南種子町  
中之上2793-1

印刷所 かわち印刷有限会社  
鹿児島市中央町27-16







D

D

